

言葉の力の育ちに関する保育者の意識について (2)

- 各年齢への期待・活動及び援助 -

梅田 優子^{1*}・伊與部ベサニー²

要旨: 保育者が子どもの言葉の力の育ちについてどのようにとらえ、またどのような援助を意図しているのかを明らかにすることを目的として、半構造化面接調査を行った。その調査内容のうち、3～5歳児期の子どもの年齢によって、保育者が言葉の力の育ちとして期待していることに違いはあるか、あるとすればどのような育ちか、また、子どもの言葉の力の育ちを促す活動や援助等をどのようにとらえているかについて分析・考察を行った。その結果、保育者は子どもの言葉の力の育ちについて、年齢なりの期待をもっていることが明らかになった。3歳児では、思いや気持ちが言葉として表現されること、それを保育者に伝えようとする姿を期待していた。4歳児では、自分の思いを言葉で伝えると同時に、相手の話を聞けることで、子ども同士のコミュニケーションが成立していくことを期待していた。また、したいことだけではなく、なぜそうしたいのか等理由を話すようになってほしいとの期待もあった。5歳児では、子ども同士が自分たちで話し合いを進めていくこと、さらに話し合いで解決したり、一つの結論をだして行動に移していったりすることも期待していた。子どもの言葉の力の育ちを意識して設定する活動や援助については多岐にわたることが明らかになった。主なものとしては、遊びや生活全体の中で子どものコミュニケーション行動の援助を逃さずにおこなうこと、グループ活動等で話し合う場面を設けること、クラス全体の前で自分の思いを発表する場面を設けることなどであった。他にも言葉を使用する表現活動や、絵本の読み聞かせや言葉遊び等の活動が挙げられていた。また、保育者の言葉の使い方に気をつけるとの援助も挙げられていた。

キーワード: 保育者の意識、言葉の力の育ち、各年齢への期待、活動及び援助、半構造化面接

1. 目的

幼児期における言葉の発達著しく、幼稚園教育要領及び保育所保育指針において、領域の一つとして「言葉」が設けられていることにも明らかなように、保育においても保育者が子どもの言葉を育てていくことは大切な内容となっている。

これまでの研究は、子どもの言葉の発達の変容に焦点が当てられているものがほとんどであり¹⁻⁶⁾、保育者に焦点を当てた研究⁷⁻⁹⁾も幾つかみられるものの、食事場面、絵本空間や読み聞かせ場面といった限定された場面での環境構

成や援助の検討が主となっている。

そこで、我々は保育者が日常の保育において、子どもの言葉の力の育ちについてどのようにとらえ、またどのような援助を意図しているのか等とらえるために、保育者へのインタビュー調査を行った。その結果、「言葉の力」については、多くの保育者が、言葉で伝え合い気持ちが通い合うといったコミュニケーションの側面からとらえている傾向が明らかになった¹⁰⁾。さらに本稿では、保育者が、3～5歳児期の子どもの年齢によって、言葉の力の育ちとして期待していることに違いはあるか、あるとすればどのような育ちか、また、子どもの言葉の力の育ちを

¹ 新潟県立大学人間生活学部子ども学科 ² 新潟県立大学国際地域学部国際地域学科

* 責任著者 連絡先: 〒950-8680 新潟県新潟市東区海老ヶ瀬 471 番地 新潟県立大学
利益相反: なし

促す活動や援助等をどのようにとらえているかについて明らかにすることを目的とする。

II. 方法

調査方法: 午前中に保育参観をおこない、午後からインタビューをおこなった。インタビューは1人あたり1時間程度とし、レコーダーとメモを用いて記録した。録音は面接の開始時点で、研究内容と録音内容についての取り扱い（インタビュー実施者のみ使用すること、内容をまとめ発表する際には園や個人が特定されないようにすることなど）について説明を行い、対象者の許可を得ておこなった。

調査時期: 2013年6月～9月

調査対象: 新潟県内の保育施設（幼稚園及び保育所）4園において、3歳児～5歳児のクラス担任をしている保育者13名と、施設長・教頭・主任等4名（経験年数レンジ:3～40年）である。
質問項目: 面接者2人がガイド用紙を手元におき実施した。項目は、「言葉の力から想起されること」「子どもの話すことと聞くことの育ちについて」「言葉の力が子ども達の生活に与える影響」「子どもの年齢によって、言葉の力の育ちとして期待していることに違いはあるか、あるとすればどのような育ちか」「言葉の力の育ちを意識しておこなう活動や援助」といった内容である。これらの質問を、面接者の状況や回答に応じて順序を入れ替えるなど半構造化面

接をおこなった。方向性を保ちつつも、インタビュー対象者の語りに沿って情報を得ることが、今回の探索的な取り組みにおいては必要と考えたからである。本稿においては、「子どもの年齢によって、言葉の力の育ちとして期待していることに違いはあるか、あるとすればどのような育ちか」「言葉の力の育ちを意識した活動や援助」への回答をとりあげて分析考察することとする。

III. 結果と考察

1. 子どもの年齢に応じて期待している育ち

分析にあたっては、面接の逐語録を作成し、意味の単位ごとにセグメントとして切り出し、各セグメントに定性的コード（以下コード）をつけた。コードごとにセグメントの内容を読み返し、コード間の差異を明らかにしながら、必要な箇所はコードの再割当てをおこなった。さらに、内容の関連が深いコードをカテゴリーとしてまとめた。結果を表1に示す。

(1) 3歳児

1) 自分の思いを言葉で言う

3歳児に期待する姿として最も多く言及されていたのは、自分の思いを言葉で言うことであった。中でも多かったのは“保育者に対して”自分の思いや気持ちを言葉にして伝えることであった。

表1 各年齢への保育者の期待

年齢	カテゴリ	コード	言及者数
3歳児	自分の思いを言葉で表す	自分の思いを保育者に伝える	7
		だんだんと友達にも伝える	5
		自分の思いを言葉で言う	3
	聞く	言葉を真似して言う	2
		皆と居る場で聞く	2
	会話を楽しむ	友達と会話を楽しむ	1
4歳児	コミュニケーションがとれる	友達に言葉で伝え、相手の思いも聞いて理解する	8
	自分の思いを伝える	自分の思いを言葉で伝える	3
		少しずつ理由等が言える	2
	聞く	友達の話聞く	2
話し合う	話し合って決めていく	3	
5歳児	話し合う	友達と話しあう	13
		目的に向かって話し合って決めていく	6
		理由等が言える	4
	大人にわかるように伝える	状況をわかるように伝える	1
困ったことを先生に伝える		1	

< 自分の思いを保育者に伝える >

年少のときは、自分の気持ちを、ま、友達には無理だろう、難しいかなと思うんで、大人にでいいので、大人に言葉で言えるようになってもらいたいと思う。(3歳児担任)

[最後の()内は、インタビュー時の担任クラスである。記載なしは、園長・教頭・主任といった立場となっている。以下同じ。]

3歳の1学期は、まず対、私。○○ちゃんと私。××君と私っていう、その関わりの中での言葉の使い方を、そこでいっぱい経験していくことを大事にして。(3歳児担任)

3歳のときにはまず、思ったことを言える。うれしい、貸して、ちょうだい、僕のだよ、嫌だよとか、そういうことを言える。最初は、私たちに言ってほしいなって思うんです。(4歳児担任)

3歳児は保育者に対して思いを言葉で表現していくこと、ただ、それはやがて、子ども同士のコミュニケーションにつながっていくとの期待が内在していることが窺える。その期待を3歳児後半の姿として語っている保育者もいた。

< だんだんと友達にも思いを伝える >

まだまだ言葉でコミュニケーションというよりも、あの楽しそうな場に、自分がそこに居る。そこからなので、やっぱりまだまだ友達同士の言葉ってのは、もしかしたら、まだまだ伝わってない。ただ、3歳の終わり頃には、すこーし、一緒に関わってっていうか、言葉で自分の気持ちが少し言えるようになってるところを3歳で目指したい。(3歳児担任)

だんだんと、友達に、僕が使ってるよでもいいですし、僕も使いたいよとか、貸してとか、どうしても、3歳って、そんなに長い文章言っていないんですよ。結構、単語のことが多いんですけど。3歳は、まずはやっ

ぱり、自分の思ってること言葉で、こうやって表してっていう。(4歳児担任)

でも、おまけにやっぱ、ちょっと友達もくっついてきて、友達の名前を知って、△△ちゃんて、ちょっと呼び掛けたりとか、何か知ってるものとか、同じ言葉を言ってみるとか、そういう、コミュニケーションみたいな感じにと思って。(5歳児担任)

このようにして、子ども同士のコミュニケーションが徐々に成り立っていくことが期待されていた。

< 自分の思いを表す >

3歳では言葉で“伝える”ということを保育者としては意識しすぎず“言葉にして表す”ところが十分に育つことに力点を置いて期待を語る保育者もいた。

3歳は、どっちかといえば、相手に伝えようと思わなくてもいいから、出してほしいというか、こっちが聞く側に回って回って、聞いて聞いてっていうふうに思ってた。(3歳児担任)

3歳児のときは、やっぱり大人、私たちが子どもたちの話をたくさん聞いてあげる、語彙は少なくって、よく伝わらない部分はあるんだけど、たくさんお話を聞き出してあげて、たくさんお話をしてもらって、私たちが聞いてあげることで、やっぱり子どもたちも安心してまた話したくなるんじゃないかなと思うので。やっぱり耳を傾けてあげることが大事かなと。(5歳児担任)

子どもが言葉で表すこと、表したことでそれが他者に伝わるということ、伝わる喜びから伝えようとする姿勢へと育つところを3歳では大事にしたいとの思いが窺える。そこでは保育者の存在が不可欠である。保育の場において、幼い子どもの言葉での淡い表現の受け手になり得る大人は保育者だけだからである。先述した「自分の思いを保育者に伝える」ことでも同様であるが、自分の思いが言葉化され始める3歳児へ

の期待が語られるときには、支え手としての保育者の存在も同時に語られるところに特徴があると思われた。

2) 聞く

3歳児で「聞く」姿についての期待も語られていた。一つは、好きな遊びの場面で耳に入ってくる言葉を「聞く」ことについての言及であり、もう一つはクラス全体で集まる場面で、子どもが集団の一人として保育者の話を「聞く」ことについての言及であった。かなり性質の異なる聞くことへの言及であるが、3歳児にとっての聞くことの育ちに対する期待として今回は同一のカテゴリーとしている。

<聞こえてきた言葉をまねする>

あとは、何かお友達が言ってるなーっていうのを独り言のようにして、これはああしてね、こうしてね、なんて言いながら、3歳なんて遊んでることが結構あるんですけど、それをたまたま、コネコネなんて言ってるの、何か聞こえてきたなって思ったときに、自分も一緒にそれ面白いなと思ったら、コネコネって言いながら、ちょっとやってみたりだとか、そういうふうには、楽しいなーって思って聞くとか。そんなところなのかな。(4歳児担任)

<みんなと居る場で聞く>

聞くは、それこそ最初の段階っていうか、1年通してですけど、みんなが居る場で、1人の人の話を聞けるっていう。私(保育者)と1対1じゃないけど、私のことも話してるんだよねって思って、聞けるとか、そういうところかなっていうのも、思いますし。(4歳児担任)

聞く姿についての言及は、その力がついていくことにつながる“体験の積み重ね”への期待として語られている面が強いように感じられた。

3) 友達とのやりとりを楽しむ

個人差があることに言及しつつも“友達とのやりとり”の姿を期待としてあげる保育者が1名みられた。

<友達との会話を楽しむ>

3歳はもう何ていうのかな、本当に特に4月生まれと3月生まれでは全く、まだ3月の子はおむつしてますんでね。でも、そうですね3歳はとにかくなんか楽しいことをたくさんして、あのお友達と元気に会話を楽しめるかな。あの本当に会話が楽しくてしょうがない時期に入ってくると思うので、それをたくさんたくさん経験したり……。はい。ただけんかしてばかとか言ってんじゃなくて、やっぱりお友達とあのあれしようこれしようとかね、あのそういう二語分、三語分ぐらいで、もう相手にお互いやりとりとかできるといいかな、と思いますね(5歳児担任)

このような友達とのやりとりについての期待は、4歳児での期待として多く言及されていた。3歳児期後期の姿としての期待を語っているものと思われた。

(2) 4歳児

1) コミュニケーションがとれる

4歳児においては、“子ども同士”のコミュニケーションが成立していくことへの言及が多くみられた。

<友達に言葉で伝え、相手の思いも聞いて理解する>

4歳はやっぱり、お友達と一緒に頑張ってるっていうところも、ちょっとずつ出てくるので、相手が居るんだよっていうところは意識してほしいかなって思っています。相手の言ってることも、もちろん聞いてほしいし、自分の思ってることも、ボソボソって言うんじゃなくて、こう思うよっていうふうに伝えてほしいし。(3歳児担任)

4歳春に、2、3人のお友達、今まで大好きなお友達だけだったのが、もうそばに居るお友達に、だんだん最後には、同じ遊びが好きなお友達に、その中でのコミュニケーションが取れる。遊びを通して取れるようになる。(3歳児担任)

4歳になると、やっぱり、先生もそうだけど気の合う子とかが1人、2人できて。1人、2人には、自分のやりたいこともそうだし、してほしいこともそうだし、言えるみたいなの。お互い。お互い1人でもいいから、そういう子が居るみたいなの。仲良しの子に、まず、自分の気持ちゼーんぶ、1人でも2人でも、言えたりってこと。けんかとかも始まると思うんですけど、嫌な気持ちを言いながら、何か、やだなー、相手が違うこと思ってるなーってやっぱりちょっと気付くみたいなの。そんな経験をいろいろして、でも楽しいなっていうふうになってほしいな。(5歳児担任)

このように、保育者は、子どもが友達と言葉でやりとりをしながらコミュニケーションが成立していくことを期待している。けんかも起こるが、それを通してお互いの気持ちに気づく経験となってほしいことも、あわせて期待として語られる傾向があった。

2) 自分の思いを伝える

自分の思いを単語だけではなく、少しずつ文章として伝えることができるようになることとして期待を語る保育者も見られた。

<自分の思いを言葉で伝える>

次の段階はそれを踏まえた上で単語だけではなく、じゃあそこに自分が、本当にどういうふうにしてほしいかっていうのをちょっと気持ち二語文、三語文とかね、文章にして表してほしいなっていう思いがあります。(例えば)3歳ぐらいであれば「トイレ」とかってそういうふうに言うことが、今度4歳ぐらいになったら「トイレ

に行きたい」「先生、何々したい」とかって、その自分のしたいこと、嫌なことってというのが、嫌なのかやりたいのか、好きなのか楽しいのかっていうのを、まだほんのちょっとでいいので……。感情とか思いも出てくるといいかなって思いますし。はい。

<少しずつ理由等が言える>

さらに、4歳児では、「〇〇が嫌だ」だけでなく「どうして嫌なのか」といったことを、少しずつ言葉で表現できるようになっていくことへの期待も語られていた。

年中だと、どうしてそういうふうにしたのかっていう、もうちょっと突っ込んだところ、思いついてというのが、多分、少しずつ言えるようになるんじゃないかなと思うので。その辺のところ。年中から。こう、年長にかけて、徐々に言えるように、なってほしいなと、思います。(3歳児担任)

4歳ですね。まだやっぱりちょっとね、年長に比べたらもちろん落ちるんですが、それでも自分でその自分の嫌な、嫌だったこととかもちゃんと伝え、言葉にして伝えてほしいなと。感情をやっぱりあの楽しいこともうれしいことも、ただ面白かっただけではなくて、あのどんなふうに面白かったとか、どこが嫌だったかとかっていうのを、ただ嫌だしと言わないんじゃないかと、もうちょっとこう深いところ、一言でも二言でも表現してくれるといいかなと思います。(5歳児担任)

3) 聞く

4歳児においては、「聞く」についての期待も、子ども同士間についての言及となっていた。

<友達の話聞く>

4歳で、大人の話もそうだけど、お友達の話も聞きたいことも聞いてあげられるっていうね。(3歳児担任)

年中になったときは、ちゃんと聞いてほしいんです、友達の話。一緒に、それぞれ、年少のときって、1人で遊んでる、1人の、自分の世界だけで遊んでることも結構多いんです。みんなで、最後のほうになってくると、ようやく、2人ぐらいの子と、ちょっと何か、お店屋さんという気持ちで、しかも、一緒にの気持ちでやってたりもするんですけど、でもやっぱりそれも、すごく、淡いので。なので、年中になったときは、今までよりは、僕と遊ぼう。よし、じゃ分かった、あなたと遊ぶ。じゃ、何をするっていうふうになったときに、友達と遊ぶ楽しさ知ったから、友達の話も聞かないと、自分の思いだけ言ってたら、遊びが成り立っていかないんで、そういうところで、友達の話を知ってるところが、どうしても、大前提で出てきます。今度、そういうのも踏まえながら、今度やっぱり、いざこざだとか、けんかですね。子どもたちの気持ちのぶつかり合いのときに、やっぱり、相手の気持ちに今度は気付く、聞きながら気付く。年中から、ちょっとずつ、ちょっとずつですけど。(4歳児担任)

4歳児期にはいってくると、保育者は子ども間でのコミュニケーションが成り立っていくことを強く志向していることが窺える。言葉でのやりとりが噛み合っていくには、相手の話すことを聞いて理解していくことが必要であるとの面から、聞く力の育ちを期待している傾向がある。そして、これは、子ども同士で“話し合い”をおこなっていくことへの期待につながっているものと思われた。

4) 話し合う

子ども同士で話し合うことが期待として語られるが、実際には話し合いが成立することが難しいこと、かなり保育者が入り込んで一緒になってその話し合いの場面を構成し、共に話し合う体験を支えていることが語られていく。

<話し合って決めていく>

やっぱり簡単な子どもたちが決められること、(4歳児の)後半にやったんだけど、(ゲームの)鬼をみんな「やりたいやりたい」って言ったときに、「じゃ、どうしようか」って言って、「みんなこうやってやりたいけど、みんながなるわけにいかないね」って言って。「どうしたらいい」って言うと、子どもたちは、やっぱり「じゃんけん」とか(####)鬼ごっこはしているから、じゃんけんていうのはもう結構あるんです。ほんと簡単な、まずはそういうことから……。4歳の後半のときは、まだそういうのに慣れてないんで……。「ああ、そうか。じゃあ、そういうのなんだね」って言って、「じゃ、そういうふうにしてちょっとやってみようか」って言って、やって、だけどもまだうまくいかない子どもたちだから、けんかにもなる。「どうしても僕は譲らない」っていうふうになるから、そこで、私がちょっと橋渡しとして、「じゃあ、別のやり方あるんじゃない？」っていうふうにして……。(5歳児担任)

やりとりをできるだけ自分たちで解決してほしいなと思ってたんですけど、なかなかそれが難しく。間に入ってお話を、どちらかというとなんか私が多く言葉を発して……。「今おもちゃ取ったの？」って聞いて、「だって何々だったんだもん」てなって、そこから始まらないので、「じゃ、何とかちゃんはどうだったの？ これを使ってたのかな？」ってなって、「でも僕が先に使ってた」とかなったら、「じゃ、その前は誰が持ってたのかな」って、わりと一つ一つ。「じゃ、取っていいのかな?」、「駄目だよ。お友達にお話しすることがあるかな?」、「ごめんね」って……。こう言葉でわりと、ちょっと入りすぎなのかなと思ったんですけど、でも最初はそれぐらいが必要で、なかなか男の子が……。(4歳児担任)

このような体験を子どもたちが積み重ねていくことで、5歳児の育ちとして多くの保育者が言及する“子ども同士での話し合い”をする姿へと育っていくものと思われる。子どもへの期待と同時に、子ども同士の話し合いの場面に求められる保育者の役割があわせて語られるところに4歳児期の特徴があると思われた。

(3) 5歳児

1) 話し合う

5歳児では多くの保育者から、友達と話し合うことが期待として語られていた。

< 友達と話し合う >

年長になったら、聞きながら、自分はじゃあ、こう思うなっていうのを言えるようになってほしいです。それを、聞き入れる。受け入れる。受け入れた上で、でも自分はこう思うよとか。僕も同じ思いだよとか。もう願うところはやっぱりそこなんですけど、難しいんです。(4歳児担任)

5歳だったら、えと、友達にも、自分の気持ち伝えつつ。相手のことも、相手のその考えてることも、ちゃんと、理解っていうか、受け入れながら。ちょっと、自分でも葛藤しながらでも、お友達と、その、やりとりっていうんでしょうかね。遊んだりとか、いろんな場面、やりとりしていくようになってもらいたいなと、思いますし。(3歳児担任)

5歳で、友達同士でやりとりをして、遊びを楽しめる。いつもぶつかってしまうじゃなくて、そこで「あ、いいよ」とか、「でもこれはこうしたいな」とか、ちょっと引く部分とかもちょっと自分で感じて、そういうふうに見えるといいなって。(4歳児担任)

“話し合う”の中身には、自分の思いを言えることと同時に、相手の言っていることも聞くこと、それを理解したり受け入れたりもするといった面が育つこと、それにより“話し合う”ことができいくとの保育者のとらえや期待があることが窺えた。

< 目的をもって話し合って決めていく >

さらに、目的意識をもって話し合い、一つのことによって行動していくといった育ちも期待として語られていた。

年長になったら、もう、ちょっと目的意識じゃないですけど、少し自分の好きな子、お気に入りの子だけではなく、同じグループとか、小学校じゃないですけど、いろんなお友達と一つの目的で少し話し合ったり、こうがいいんじゃないとか言える。一緒にカレー作りましょうとか、一つ劇しましょうとか。グループで一つ何か決めて。みんながお気に入りじゃないけど、たまたまのチームで、その中でちょっとどうするっていう関わり方の言葉の力。(3歳児担任)

5歳児は、今度は何を決めるにしても、役割分担だとか、きょうの遊びは、じゃ、こういうふうに進めていきたいだとか、そういうのを子どもたち同士でグループごとにお話し合いを、じゃあこの時間まで、お友達同士で話して、決まったことを聞かせてっていうふうにして。子どもたち同士で、私が入るんじゃなくて、ディスカッションをしてもらって、そして自分たちで決めて、自分たちで次の行動に行けるように…。(5歳児担任)

< 理由等が言える >

話し合ったり、解決したりするには、どうしてそうしたいのか等の理由を友達に伝えられるようになるという言葉の力の育ちを期待として語る保育者も見られた。

あと5歳ぐらいに年齢上がってくれば、じゃそれを今度、嫌だったらなんで嫌なのかっていう、そんな自分の思いをしっかりと今度伝えられるようになってほしいなっていうのは、はい、思いはあります。年長5歳児ぐらいになるとただ「何々して」って言っても、それを無視する子ども中にはいるんですよ。そこでなんで嫌なのかっていうことをちゃんと伝えてあげると、思いを共感できるっていうのかな。

2) 相手にわかるように伝える

さらにその場にいなかった相手にも、状況などが分かるように伝えられることを期待する保育者もみられた。

< 状況がわかるように伝える >

うーんとそうですね。本当に個人差がありますけれど、あのやっぱり言葉の力って一概に言うのが難しいんですけど、できるだけこう言葉がやっぱりつながって物事の状況を説明してくれる、あの目の前で見てることではないことでも、ある程度人が分かるように伝えてくれるのが年長ぐらいだとありがたいなと。いつ、例えば昨日何があったとか、その前の日は何があったとかっていう辺りがこう分かるといいかなって思います。年長ぐらいになると、はい。(5歳児担任)

状況を知らない人にでも説明できるといったような言葉の力の育ちがあれば、小学校で困った時にきちんと先生にわかるように伝えられると、就学を意識した発言もみられた。

2. 子どもの言葉の力の育ちを意識しておこなう活動や援助

では、子どもの言葉の力の育ちを意識した活動や援助を保育者はどのように考えているのだろうか。質問に対して保育者から語られた内容を整理すると表2のようになった。

子ども同士のコミュニケーション行動を支えたり、子ども同士のコミュニケーションが引きだされるような活動場面を設定したりするなど、子どものコミュニケーション面に焦点をあてた言及と、保育者自身の使用する言葉の面に焦点をあてた言及がみられた。

(1) 子どもの言葉でのコミュニケーションを支え、引き出す

園での遊びや生活全体を通じて、子どもの言葉について意識して援助をおこなっているとの語りがみられた。

< 遊びや生活全体の中で >

やっぱり、こう、個々の子どもとの関わりの中、どういうふうに伝えればいいのかっていうのを。例えば、貸してとか、あの、寄せてとか、そういうのが言えない子には、そういうふうに言えばいいんだよとか。言えなかったら、こう、一緒に言ってあげるから行こうとか、で、どういうふうな言葉を使ったら、関わりが持てるだとか、何か遊びとかそういうのがうまくできるか、お友達とうまく関わられるかっていうのを、中心的な、何かの活動っていうよりも、もう、その毎日の生活の中で。遊びの中とか、その、ほんのちょっとしたところで、やっぱり言葉がけをしたりっていうところが多分、今のところは、主になっているんじゃないかなと思う。(3歳児担任)

表2 子どもの言葉の力の育ちを意識して行う活動や援助

カテゴリ	コード	言及者数
子どもの言葉での表現を支え、引き出す	遊びや生活全体の中で	5
	グループ活動で	3
	話し合う活動で	2
	発表の場面で	3
	表現活動で	2
	言葉遊び等の活動で	3
保育者の言葉に気をつける	モデルとなるように	2
	否定語を使わない	2
	わかりやすく語りかける	2

全てに込めています。1日の生活の中、全てです。朝来てから。それこそ遊びの中ではありません。もちろんですし、他にも給食だとか、いろんな場面で願っています。なので、今が、今だって思ったら、逃さないと思って。(4歳児担任)

自分の気持ちを伝えてほしい、自分の思いもちゃんと言葉にしてほしいっていう思いがあるので。もう「先生たたかれたー」とか「ギューされて嫌だったー」っていうことを私に言ってくるので、「じゃそんなふうに思ってるんだったら先生に言うんじゃないかってお友達に言ってみたら？」なんて言って。で、「うーん、でも1人だと行けない」って言う子もいるので、「じゃ先生も一緒に付いてあげるとか、じゃお話ししてごらん」って、「もし言えなかったら先生もお手伝いするからね」なんて言って、うん、声を掛けて。自分でこうなるべく自分の思いを伝えられるようにしています。(4歳児担任)

また、特に、好きな遊びの場面での援助を強調した発言もみられた。

自らの遊び、ああいう時間帯が一番私の中では、1日の中で勝負の時間とってるんです。私の中で一番大事に、言葉を大事にしてるのは、あの大きな時間帯。自らの遊びのところを、私は大事にしています。(3歳児担任)

子どもが自らの思いや気持ちを表そうとする姿は生活全体にあるが、特に子ども自らの遊びを展開する、いわゆる自由な遊びの場面では、子ども同士でのやりとりが多くなる。そうした場面での子ども同士の伝え合いを支えていこうとする姿勢の強いことが窺える。

< グループの活動場面で >

生活の中で何かを決める際や行事をつくりあげていく際にグループでの活動を行い、その中に話し合いの場面を設けることを意識しているとの言及がみられた。

グループで例えば活動するとき、一つ例えばこの間やったんですけど、グループの名前を決めようみたいな。そのときはあえて、グループ活動にして、私が、一つなんでも秋のものねっていう題だけ決めて、お互い出し合って、決めるとか、そういうリンクしながらっていうか、でしょうかね。(5歳児担任)

年長の初めからグループの活動、そういう機会をあの一緒に一つのものを製作したりとか。(例えば)グループでこいのぼりを一つでっかいのをみんなで作ろうとか。それに向かうにはまず小さなグループからそこで協力をし合いながら、あとお互いにちょっと相手の思いにも気付きながら自分の思いだけ一方的に言うんじゃないかって……。いろんな意見を出してくれる子がいるので一人一人の意見、いいね、いいねって、それそんなのおかしいっていう子もいるかもしれないんだけど。変だって言いたかった思いも分かるんですよ。でも「どうして？」って言うとうーんって考え込んでしまって。そういう経験が何度かしておこなうと、すぐに変だっていうことじゃなくって。やっぱりその子の一人一人の、あの勇気を振り絞って意見を出してくれることも出てきてるんですね。今まではそれまではあんまり自分の意見言わずに、やっぱり積極的に意見言った子の陰に隠れていた子が、それが逆転するときもあったんですね。で、言ったことによってその子の意見がいいからってそれを取り上げることによって、その子もまた自信を持ってやる。だからそういうあの一、キャッチというのかな、を。

5歳児で期待する姿として挙げられていた“子ども同士が話し合う”場面が意図的に設けられていることが見えてくる。そして、話し合う体験の積み重ねで、話す姿の少なかった子どもも意見を言う姿が出てくること、それを保育者ができるだけキャッチして逃さずに支えることが、話し合うことの手応えや楽しさの体験と

なり、自分の思いを話そうとする姿勢の育ちへとつながると考え援助していることが窺える。また、何か一つに決めていくようなテーマ設定なども工夫していることが見えてくる。グループに限定せず、子どもたち同士が話し合う活動を意識して設けているとの言及もみられた。

< 発表する場面を設ける >

子ども同士が話し手になったり、聞き手になったりするという、いわゆる発表の場を挙げる保育者もみられた。

今は、例えばお休みの後に、何してたのーとか、1人ずつ聞いてみたりとか、そういう機会は入れるようにしてて、やっぱり、何してたのって聞くと、何だろうね、何だろうねって興奮してくから、聞いてほしいっていうところもやっぱり大きいので、今何々ちゃん話してるから聞こうって言って、そういう場面は意図的に、取るようにしてて。私の話を聞きなさいって言うのばかりにはしたくないので、友達の話の聞くっていうところから、ちょっと耳傾けてほしいなっていうところに、ちょっとしてるのかなって思います。(3歳児担任)

あれ、お当番カードなんですけど。1日の終わりに、あの子たちが、何が楽しかったか、発表する。いや、でも、ほんと、何が楽しかったですかとかって言って。なんか、一言言うだけなんですけど。そこでなんか、こう。子ども同士が、話す。話し手、聞き手みたいな。大人が話し手で、子どもが聞き手はよくあるんですけど。その。そこで、ま、この子たちも、自分が出せると思うし。この子たちは何となくこう聞いて。聞くんだよ、とはいっつも言っているの。その場はお当番の人が発表。3人の子が前に立って。で、今やり始めたばかりなんですけど。ま、どうかなっていう。(4歳児担任)

クラス全体に向かって話すという体験、それをクラスの皆と一緒に聞こうとする体験の積み重ねを意図していることが窺える。

< 表現活動で >

劇などの表現活動を挙げる保育者もみられた。

いわゆる表現活動。例えば、発表会みたいなのであったりとか、普段の本当に劇遊びみたいなので。劇遊びとかもそうだと思うんですけども、言葉なしでは成立しないので。

ここは、教材を使ったりとかワークを使ったりとかそのお勉強しましょうとかそういうことの園ではないので。それをあの一、その遊びの中とか、その年齢に応じて降ろしていくのはあるんですね。(例えば)そうですね。大きなものとしては、クリスマス会に向かったの劇遊びとかっていうこともあります。ま、クリスマス会に向かってっていても、そのクリスマス会に向かうだけになって、それをやってるんじゃないんですけども。その劇遊びの中でいろんな言葉のやり取りを少しずつ・・・セリフを言ってみたりっていうこともありますし。

劇活動が挙げられているのは、活動じたいが言葉によって成立するというと同時に、劇を作り上げていく過程において子ども同士が話し合うといった要素が含まれることにもあると思われた。

< 言葉遊び・絵本・紙芝居等の活動で >

言葉遊びや、絵本の読み聞かせ等の活動についての言及もみられた。

言葉遊びとかもしたり。なんか、逆さ言葉を使って遊んでみたりとか。あと、私絵本が好きなので、絵本は1日1冊必ず読めるようにとか。紙芝居はご飯の後に必ず読んで、帰る前に絵本を1冊読んでみたいな感じで、お話に触れる機会をなるべくしてみたり。(5歳児担任)

やっぱり、絵本とか、紙芝居とか、そういうところでも、ちょっと言葉を意識して読んだりとか、あと、歌もそうだと思うので。

手遊びとかも取り入れて。なんか、自然にその言葉が発達するようにしていくようには心がけてます。(3歳児担任)

言葉だけで遊ぶならば、例えばしり取り遊びだとか。あの早口言葉とか、あとあの上から読んでも下から読んでも同じ(逆さ言葉)だとか。

しりとりや逆さ言葉などは、子どもの言葉が育つことで楽しめるようになる遊びである。また絵本や紙芝居の多くは言葉と絵によって成り立っており、それを保育者に読み聞かせてもらう活動は、実際に言葉に触れたり使ったりする活動となるという点で、保育者から意識的な活動として挙げられているものと考えられた。ただ、そうした活動が子どもの言葉のどのような育ちにつながるかといった語りは、ほとんどみられないところに特徴があった。絵本等は親しむ機会(体験)をもつことが大切ととらえているように思われた。

(2) 保育者の言葉に気をつける

子どもが言葉を獲得していく際に、保育者がどのように言葉として表現するかが、子どもたちの使用する言葉に影響を与えるとの言及もなされていた。

<モデルとなるように正しい言葉で>

自分たちの言葉遣いかな。保育者の言葉遣い。まねしますので。優しい言葉で、使うようにしています。保育で。やっばこう、自分たちが正しい言葉を使っていれば、子どもも、使うようになって。ひいては、それが、教育なのかなと。(4歳児担任)

<否定語を使わない>

今日も話してたんですけど、結局マイナスの言葉を使わないで。例えば「しなさい」命令形だとか、「駄目だよ」の禁止とか、そういった言葉は使わないで違う言葉で同じことを伝える。私、先生たち皆さんにマイ

ナスの言葉は使わないでねって、マイナスの言葉は使わないで伝える方法で伝えてくださいというのを、この園では言ってるんです。

<わかりやすく語りかける>

うん、意識してますね。はい。例えば、言葉のかけ方を分かりやすく言ったりとか。私が子どもたちに対して。やっぱり年少さんなので、なるべく分かりやすく言うようには心がけていますし。そうですね。短く言うとか。あと、当たり前なんだけども。難しい言葉、使わないように。子どもが分かるように、どういうふうに言ったらいいかなっていうのを考えながら。(3歳児担任)

保育者の言葉については、幼稚園教育要領解説においても「正しく分かりやすく、美しい言葉を使って幼児に語り掛け、言葉を交わす喜びや豊かな表現などを伝えるモデルとしての役割と果たしていくことが大切」¹¹⁾とされており、周囲の身近な大人の言葉が子どもたちの使用する言葉に影響するとの考え方が、このような語りにつながっているものと思われた。

IV. 総合考察

1. 保育者が年齢に応じて期待する姿

保育者は子どもの言葉の力の育ちについて、年齢なりの期待をもっていた。3歳児では、思いや気持ちが言葉として表されることや、保育者に対して伝えようとする姿を期待していること、それがやがて子ども同士のコミュニケーションにつながることを期待していることが窺えた。4歳児では、子ども同士のコミュニケーションが成立し、友達に言葉で自分の思いを伝えたり、相手の言っていることを聞いたりすることを期待していた。また、なぜそうしたいのか理由等を話せるようになってほしいこと、それが子ども同士で話しあうことにつながっていくと期待していることも見えてきた。5歳児では、子ども同士が、自分たちで話し合いをしていくことへの期待が、多くの保育者によって語られていた。さらには話し合って解決したり、

一つの結論にまとめて行動に移していくことも期待していることが窺えた。

子どもの「言葉の力」として想起される内容について¹²⁾は、意思や気持ちを伝えたり、言葉をやりとりして心を通わせたりといった、コミュニケーションの側面に焦点をあてたものが多いことを既に報告した。「言葉の力」ではコミュニケーションについて言及していなかった保育者も含めて、3、4、5歳それぞれへの期待についての語りにおいては、保育者は例外なく、子どものコミュニケーション面に焦点をあてて語っていた。保育者は、子どもがコミュニケーションを徐々にとれるようになり、幼児期後半において、言葉による活発なやりとりができていくプロセスを思い描きつつ、各々の年齢での期待について語っているように感じられた。その期待は、コミュニケーション対象の広がり、言語化される内容の複雑化といった、大きく2つの側面での変化ととらえることができるのではないかと思われた。

言葉でのコミュニケーションの対象については、幼いときには保育者に対して、そして徐々に子ども同士へと広がることへの期待であった。保育者の中には、そのプロセスをさらに具体的に思い描き、「最初は仲良しの友達に」そして「同じ遊びをしている友達に」、さらには「たまたまグループになった友達」「クラス内の子どもなら誰とでも」といったように、子ども同士の中でも言葉でのコミュニケーションができる相手の広がりを意識している保育者も存在した。

もう一つの側面である、コミュニケーションで言語化される内容の変化については、先ず、自分が「どうしたい」「こんな気持ち」などを伝えることから、「どうしてそうしたいか」「なぜそんな気持ちなのか」といったようにその理由等について伝えられるようになっていくこととして期待が語られていた。より複雑な内容を相手に伝えられるようになることにより、子どもが相手の思いや気持ちを聞き、理解することへもつながり、自分たちで話し合い、ときにはぶつかりあいながらも、自分たちでものごとを解決したり、話し合いの結果を一つにまとめて行動したり作り上げたりしていくことができる

ようになるとの期待へとつながっていることが窺えた。

2. 子どもの言葉の力の育ちを意識しておこなう活動や援助

子どもの言葉の力の育ちを意識しておこなう活動や援助として言及される内容は、多岐にわたるものとなっていた。

援助としてあげられていたものの一つは、遊びや生活全体の中で、特に子ども同士のコミュニケーション行動の援助を逃さずにおこなうということであった。子ども一人一人が、その必要感を感じた時に、言葉にしていくこと、そこで自分の思いや気持ちが伝わっていくことやその喜びを感じていく中で、子ども同士の伝え合いが成立していくこと、それが活発になされていくことを支えていくことが目指されていた。また、そうした過程においては、当然のことながら思いがすれ違ったり、考えの違う相手とのいざこざが起こるものであり、そうした体験を通じて、一緒に遊びや活動を進めていくには相手の思いにも耳を傾けていくことの必要感を子どもが感じ、話を聞く姿勢を育てようとしていることも窺えた。こうした保育者の意識は、幼稚園教育要領や保育所保育指針において「経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う」¹³⁾ 観点から領域「言葉」が示されていることと重なっていると言えるだろう。

また、保育者は、共に過ごすことの多い仲良しの子ども同士だけでなく、グループやクラス全体で“話し合う”体験が積み重なるように、行事等に向けてのグループ活動等の中に、話し合う活動場面を意図的に設ける援助をおこなっていることも見えてきた。さらに、クラス全体の前で、自分の思いを発表し、皆に伝える体験や、発表する人の話を皆で聞くといった体験を意図して設ける保育者もみられた。

また、言葉そのものを使用する表現活動や、言葉遊びや絵本等の活動を、言葉が育つことを意識した活動として挙げる保育者もみられた。

子どもの言葉の力の育ちを意識した活動や援助についての保育者の回答に幅広さがあること

は、「言葉」が人間生活全体に渡っているものである故であろうが、その中で保育者によってまず焦点化される内容に違いがあることが明らかになったことは興味深い。しかしながら、各々の保育者の回答は、現在担当しているクラスの子どもの年齢による影響もあると思われた。この点についての検討は今後の課題である。

さらに今後は、実践の場での実際の子どもの姿と保育行為をとらえ、子どもの言葉の力の育ちを支えていく保育のありようを具体的に明らかにすることも課題である。平成20年に行われた小学校の学習指導要領の改訂では、教育内容の主な改善事項の一つとして「言語活動の充実」が盛り込まれた。平成23年には「言語活動の充実に関する指導事例集」¹⁴⁾も出版され、その第2章(2)「コミュニケーションや感性・情緒に関すること」において「コミュニケーションは、人々の共同生活を豊かなものにするため、個々人が他者との対話を通して考えを明確にし、自己を表現し、他者を理解するなど互いの存在についての理解を深め、尊重していくようにすること」や「感性や情緒を育み、人間関係が豊かなものとなるよう、体験したことや事象との関わり、人間関係、所属する文化の中で感じたことを言葉にしたり、それらの言葉を交流したりすること」を各教科等の指導の際に言語活動として充実することとされている。同時に幼児期の教育と小学校教育の連携¹⁵⁾も求められており、こうした言語活動についても、幼児期の教育・保育と小学校教育との間に見通しをもっていくことが必要となってくるだろう。幼児期の教育・保育において、何を大切に、どのように子どもの言葉の力を育てているかを明確にして、小学校教育との接続のあり方を明らかにしていくことが大切であり、今後の課題でもあると考えている。

謝辞

保育参観及びインタビュー調査に、お忙しい中ご協力くださいました園長先生はじめ先生方皆様に心より御礼申し上げます。

文献

- (1) 大久保愛 (1975) 幼児のことばと知恵. あゆみ出版
- (2) 岡本夏木 (1982) 子どもとことば. 岩波新書
- (3) 正高信男 (1991) ことばの誕生. 紀伊国屋書店
- (4) 麻生武 (1992) 身ぶりからことばへ 新曜社
- (5) 淀川裕美 (2011) 2 - 3 歳児の保育集団での食事場面における対話のあり方の変化 - 確認し合う事例における宛先・話題・話題への評価に着目して-. 保育学研究 49 (2) . 61-72
- (6) 淀川裕美 (2013) 2-3 歳児の保育集団での食事場面における対話のあり方の変化 - 伝え合う事例における応答性・話題の展開に着目して-. 保育学研究 51 (1) . 36 - 49
- (7) 横山洋子 (1998) 子どものことばが生まれる背景としての空間 - ことばの視点からの保育場面の考察 -. 保育学研究 36 (2) . 38-44
- (8) 山田恵美 (2011) 保育における空間構成と活動の発展的相互対応 - アクションリサーチによる絵本コーナーの検討 -. 保育学研究 49 (3) . 20-28
- (9) 並木真理子 (2012) 幼稚園における絵本の読み聞かせの構成および保育者の動作・発話が幼児の発話に及ぼす影響. 保育学研究 50 (2) . 75-89
- (10) 梅田優子・伊與部ベサニー (2014) 言葉の力に関する保育者の意識について. 人間生活学研究第5号 . 53-62
- (11) 幼稚園教育要領解説 (2008) 文部科学省
- (12) (10) と同じ
- (13) 幼稚園教育要領 (2008) 文部科学省
- (14) 言語活動の充実に関する指導事例集 [小学校版] (2011) 文部科学省
- (15) 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について. (2010) 文部科学省

ABSTRACT

Investigation into Japanese Early Childhood Care and Education
Professionals' Consciousness of Language Development in Children (2)
(Age-specific expectations · Educational Activities and approaches)

Yuko Umeda¹, Bethany Iyobe²

¹ Department of Child Studies, Faculty of Human Life Studies, University of Niigata Prefecture

² Department of International Studies and Regional Development, Faculty of International Studies and Regional Development, University of Niigata Prefecture

*Correspondence; University of Niigata Prefecture, 471 Ebigase, Higashi-ku, Niigata 950-8680, Japan

This research aims to explore Japanese early childhood care and educational professionals' views on children's development of verbal communication skills. The data from a series of semi-structured interviews conducted with professionals teaching 3- to 5-year olds was analyzed to highlight what expectations early childhood care and educational professionals hold for various age groups regarding verbal communication skills along with what methodologies are employed for supporting development of such skills. The participants in this study tended to have similar expectations for specific age groups of children regarding the development of verbal communications skills. In terms of three-year-olds, they hoped children would become able to express their feelings and thoughts in words and show a willingness to convey these to the teacher. For four-year-olds, there was an expectation that children would develop the ability to use verbal communication amongst themselves to both express their thoughts to others and understand the ideas of their peers in the context of play and classroom interaction. Furthermore, it was hoped that four-year-olds would begin to use words to express the reasons behind their ideas and requests. Concerning five-year-olds, it was hoped that the children would be able to discuss amongst themselves, without the intervention of a teacher, to the point of reaching a conclusion or a joint decisions regarding how to proceed in play or an activity. When asked to describe in what way the professionals supported the development of verbal communication skills in their classrooms, the participants of this study showed a tendency to focus on the development of such skills during free play or regular daily activities. In these instances the importance of intervention or guidance during times of communication breakdown emerged as a shared belief. In addition, a broad range of activities through which verbal communications skills could be enhanced also emerged. The participants referred to the creation of group activities requiring a discussion component, as well as presentation opportunities for children to express their ideas to the class as a whole. Furthermore, activities such as word play and the reading of picture books were also mentioned. Finally, there was some emphasis placed on the importance of teachers being aware of their own language use during regular activities.

Key Words: early childhood care and education professionals' consciousness, language development, age-specific expectations, educational activities and approaches, semi-structured interview